

唄立山心中一曲

泉鏡花作

一

「ちら／＼ちら／＼雪の降る中へ、松明がばつと燃えながら二本一誰も言ふことでございますが、他にいたし方もありませんや。眞白な手が二つ、悚然とするほどな婦が二人・・・最うやがて其處等一面に薄り白く成つた上を、靜に通つて行くのでございます。正體は知れて居ても、何しろ其に、所が山奥でございませう。何うもね、餘り美しくつて物凄うございました。」  
と鑄掛屋が私たちに話した。

いきなり鑄掛屋が話したでは、些と唐突に過ぎる。知己に成つて此の話を聞いた場所と、其のいきさつを一寸申陳いべる。けれども、肝心な雪女郎と山姫が長襦袢で顯れたやうなお話で、少くとも御覽の方はさきをお急ぎ下さるであらうと思ふ。で、簡単に其の次第を申上げる。

所は信州姨捨の薄暗い鮎屋の二階であつた。

—— 鮎屋さへ、のつけに薄暗いと申出るほどであるから、夜の山の暗い事思ふべしで。……其の癖、可笑いのは、私たちは月を見ると言つて出掛けたのである。

別に迷惑を掛けるやうな筋ではないから、本名で言つても差支へはなからう。其の時の連は小村雪岱さんで、雙方彼方此方の都合上、日取が思ふ壺にはならないで、十一月の上旬、潤年の順におくれた十三夜の、それも四日ばかり過ぎた日の事であつた。

—— 居待月である。

一杯飲んで居る内には、木賊刈ると云ふ歌のまゝ、研かれ出づる秋の夜の月と成るであらうと、其の氣で篠ノ井で汽車を乗替へた。が、日の短い頃であるから、五時そこ／＼と言ふのに最うとつぷりと日が暮れて、間は稻荷山唯一丁場だけれども、線路が上りで、進行が緩い處へ、乗客が急に少く、二人三人と數へるばかり。大な木の葉がばさりと落ちたやう

であるから、掻合はず外套の袖も、妙にばさ／＼と音がする。外は霜であらう。山の深さも身に沁みる。夜さへそゞろに更け行くやうに思はれた。

「来ましたよ。」

「二人切ですね。」

と私は言った。

名にし負ふ月の名所である。此處の停車場を、月の劇場の木戸口ぐらゐな心得違ひをして居た私たちは、幟や萬燈には及ばずとも、屋號をかいた弓張提灯で、へい、茗荷屋でございます、旅店の案内者くらゐは出て居ようと思つたのは大きな見當違ひ。繪に描いた木曾の棧橋を想はせる、斷崖の丸木橋のやうなプラットフォームへ、然も下りたのは唯二人で、改札口へ渡るべき橋もない。

一人がバスケットと、一人が一升壺を下げて、月にはなけれど敷板の霜に寒い影を映しながら、彼方へ行き、此方へ戻り、で、小村さんが脣を一寸まげげて、

「汽車が出ないと向うへは渡られませんが。」  
「成程。線路を突切つて行く仕掛けなんです。」

やがてむら／＼と立昇る白い煙が、妙に透過つて、  
颯と屋根へ掛る中を、汽車は音もしないやうに靜に  
動き出す、と漆の如き眞暗な谷底へ、轟と訝する

「行つていらつしやいまし・・・お靜に

ー」

と私はつい、目の前をすれ／＼に行く、冷たさう  
に曇つた汽車の窓の灯に挨拶した。此處へ二人きり  
置いて行かれるのが、山へ棄てられるやうな氣がし  
て心細かつたからである。

壇はあるが、深いから、首ばかり並んで霧の裡な  
る線路を渡つた。

「一寸、伺ひますが。」

「はあ？」

手ランプを提げた、眞黒な扮装の、年の少い改札  
掛僅に一人。

待合所の腰掛の隅には、頭から毛布を被つたのが、

其も唯一人居る。……此が伊勢だと、彼處を  
狙つて吹矢を一本――と何も不平を言ふのでは  
ない、旅の秋を覺えたので。――小村さんは一  
旦外へ出たが、出ると、すぐ、横の崖から巖を滴る、  
ひた／＼と清水の音に、用心のため引返して、驛員  
に訊いたのであつた。

「其の邊に旅籠屋はありませんか。」

「はあ、別に旅籠屋と言つて、何ですな、此から  
下へ十四五町、……約半道ばかり行きますと、  
湯の立つ家があるですよ。外は大概一週間に一度ぐ  
らゐなものですなあ。」

「あの風呂を拂かしますのが。」

「然やう。」

「難有う――少し何うも驚きました。とに角、  
其處等まで歩いて見ませう。」

と小村さんが暗がりの中を探りながら先へ立つて、  
「いきなり、風呂を拂かす宿屋が半道と來たんで  
は、一口飲ませる處とも聞きにくうございますよ。

しかし何か知らありませんか。何しろ暗い。」

と構内の柵について………灯の百合が咲く、

おほ 大な峰、広い谷に、はら／＼とある灯をたよりに、  
ものゝ十間とは進まないで、口を開けて足を噛む狼  
のやうな巖の徑に行惱んだ。

「何うです、一層此處へ蹲んで、壕詰の口を開け  
ようぢやありませんか。」

「まさか。」

と小村さんは苦笑して、

「姨捨山、田毎の月ともあらうものが、こんな路  
で澄まして居るつて法はありません。吃と方角を取  
違へたんでせう。お待ちなさいまし、逆に停車場の  
裏の方へ戻つて見ませう。いくらか燈が見えるやう  
です。」

雙方黒い外套が、こんがらかつて引返すと、停車  
場には早や驛員の影も見えぬ。毛布かぶりの瘦せた  
達磨の目ばかりが晃々と光つて、今度は何うやら羅  
漢に見える。

と停車場の後は、突然荒寺の裏へ入つた形で、芬  
と身に沁みる木の葉の匂、鳥の羽で撫でられるやう  
に、さら／＼と――袖が鳴つた。

落葉を透かして、山懷の小高い處に、まだ戸を鎖さない灯が見えた。

小村さんが、まばらな竹の木戸を、手を擴げつゝ探り當てゝ、

「屹と飲ませますよ、此の戸の工合が氣に入りました。」

と努よく、一足先に上つたが、程もあらせず、ざわ／＼ざわと、落葉を鳴らして落來るばかりに引返して、

「退却……」

「え、安達ヶ原ですか。と聞く方が慌てゝ居る。」

「いゝえ、爺さんですがね、一人土間で草鞋を造つて居ましてね。何だ、誰ぢやいッて喚くんです。」

「いや、それは恐縮々々。」

「まことに濟みません、発起人が此の様子で。」

「飛んでもない。恚う言ふ時は花道を歌で引込むんです、柄にはありませんがね。何でしたつけ、

わが心なぐさめかねつ更科や

姨捨山に照る月をみて

照る月をみて暗いから慰められて可いわけです。  
いよ／＼路が分らなければ、停車場で、次の汽車を  
待つて、松本まで参りませう。時間がありますから  
其處は氣丈夫です。

然る處、暗がり目が馴れたのか、空は星の上に  
星が重つて、底なく晴れて居る。――何處の峰  
にも銀の覆輪はかゝらぬが、自から月の出の光が山  
の膚を透すかして、巖の缺めも、路の石も、褐色に  
薄く蒼味を潮して、はじめ志した方へ幽ながら見え  
て來た。灯前の木の葉は白く、蔭なる朱葉の色も浸  
む。

恚くして辿りついた薄暗い盥鈍屋であつた。  
何しろ薄暗い。・・・赤黒くどんより煤けた  
腰障子の、それも宵ながら朦朧と閉つて居て、よろ  
づ荒もの、うどんあり、と記した大な字が、軒をか  
いて居さうに見えた。

此店の女房が、東京ものは清潔すぎだからと、氣

を利かして、正札のついた眞新しい湯沸を達引いてくれた心意氣に對しても、言はれた義理ではないのだけれど。

「これは少々酷過ぎますね。」

「此處まで來れば、あと一辛抱で、最う些と何うにかしたのがありませう。」

「實は、此の段、囁き合つて、丁ど其處が三岐の、一方は裏山へ上る山岨の落葉の徑。一方は崖を下る石ころ坂の急な奴。で、其の下りる方へ半町ばかり又足探りを試みたのであるが、がけの蔭に成つて、暗さは暗し、路は悪し、灯は遠し、思切つて逆戻りに其の饅飩屋を音訪れたのであつた。」

「御免なさい。」

と小村さんが優しい穏な聲を掛けて、がた／＼がたと入つたが、向うの對手より土間の足許を俯向いて視つゝ、横にとぼ／＼と行歩いた。

灯が一つ、ぼくと赤く、宙に浮いた切で何も分らぬ。釣ランプだが、火屋も笠も、煤と一所に油煙で

黒く成つて正體が分らないのであつた。

が凝視める瞳で、漸と少しづつ、四邊の黒白が分つた時、私はフト思ひがけない珍らしいものを視た。

框かまちの柱はしらに、天秤てんびん棒ぼうを立掛たてかけて、鍋釜なべかまの鑄掛いかけの荷にが  
 置いてある。――亭主ていしゅが擔かつぐか、場合ばあひに依よつては  
 恚かうした徒てあひの小宿こやどでもするか、鑄掛いかけ屋やの居ゐるに不ふ思し  
 議ぎはない。と、珍めづらしいと思おもつたのは、薄汚うすよこれた鬱うこ  
 金木綿んもめんの袋ふくろに包つんで、其その荷にに一挺ちやう、紛まがふべくもな  
 い、三味線しやみせんを結ゆはへ添そへた事ことである。

話はなしに聞きいた。――谷たにを深ふかく、麓ふもとを狭せまく、山やまの奥おく  
 へ入はいつた村里むらびとを廻まはる通路へんろのやうな渠かれら等らには、小唄こうたじや淨じや  
 瑠璃うるりに心得こころえのあるのが少すくくない。行ゆく先さき々くの庄屋しやうやの  
 もの置おき、村むらはづれの辻堂つじだうなどを假かりの住居すまひとして、晝ひる  
 は村むらの註文ちうもんを集あつめて仕事しごとをする、傍かたはら夜よるは村里むらびとの人々ひと々  
 に時々とき／＼の流行唄はやりうた、浪花節なにははぶしなども唄うたつて聞きかせる。  
 聞きく方ほうでは、祝儀しうぎのかはりに、なくても我慢かまんの出来でき  
 る、片手かたてとれた鍋なべの鑄掛いかけも詔あつらへると云いつた寸法すんぽう。小こ  
 兒もに飴菓子あめくわしを賣うつて一ひと手て踊おどつたり、唄うたつたり、と同おな  
 じ格かくで、ものは違ちがつても家業かげふの愛想あいそ。――盛場さかりばの  
 吉原よしはらにさへ、茶屋ちやや小屋こやのおかつばお苺盆たばこ盆に飴あめを賣うつ  
 て、爺ぢいやあつち、婆ばあやこつち、おんぢやらこつちり

こ、ばあ／＼と、鳴物入で鯛とおかめの小人形を踊らせた、おん爺があつたとか。同じ格だが、中には凄いやうな巧いのがあると言ふ。

唄ひながら、草や木の種子を諸國に撒く。・・・  
・怪しい鳥のやうなものだと、其の三味線が、ひとりで鳴くやうに熟と視た。

「相談は整ひました。」

「それは難有い。」

「さあ、二階へ何うぞ。・・・何しろ汚いんでございますよ。」

と、雨もりのやうな形が動く、紺の上被を着た婦に成つて、ガチリと釣ランプを捻つて離して、框から直ぐの階子段。

小村さんが小さな聲で、

「何しろ此の體なんですから。」

「結構ですとも、行暮れました旅の修行者に成りませうね。」

「では、其のおつもりで。ー さあ、上りませう。」

と勢よく、下駄を踏違へるトタンに、「あつ、」

と言つた。

きやん／＼きやん／＼、クイ、キウと息を引いて、  
きやん／＼きやん、クイ、クウン、きうと鳴く。

見事に小狗を踏つけた。小村さんは狼狽へながら、  
穴を覗くやうに土間を透かして、

「御免よ……御免よ……仕方がない、  
御免なさいよ。」

で、遁げないばかりに階子を上ると、續いた私も、  
一所にぐら／＼と揺れるのに、兩手を壇の端に繋り  
縋つた。二階から女房が、

「お氣をつけなさいませよ……お頭を何う  
ぞ……お危うございますよ、お頭を。」

「何に。」

吻としながら、小村さんは氣競つたやうに、

「踏着けられた狗から見りや、頭を打つけるなん  
ぞ何でもない。」

日頃、沈着な、謹み深いのが此だから、餘程周章  
てたに違ひない。

きやん／＼きやん、クイツ、キウ、きやん／＼き

やん、と断々に、聲が細つて泣止まない。

「身に沁みますね、何ですか、狐が鳴いてるやうに聞えます。」

木地の古びたのが黒檀に見える、卓子臺にさしむかつて、小村さんは襟を合せた。

件の油煙で眞黒で、ぼつと灯の赤いランプの下に畏つて、動くたびに、ふる／＼と疊の震ふ處は、天變に封し、謹んで、日蝕を拝むが如く、少なからず肝を冷しながら、

「旅は此だから可いんです。何も話の種です。……話の種と言へばね、小村さん。」

と、探らないと顔が分らぬ。

「はあ。」

「何ですか、此邊には、あはれな、寂しい、物語がありさうな處ですね。あの、月宵鄙物語と言ふのがあります、御存じでせうけれど。」

「いゝえ。」

「それはね、月見の人に、木曾の麻衣まくり手したる坊さん、と言ふのが、話をする趣向に成つて居

るんですがね。

「更科山の月見んとて、かしこに罷登りけるに、大なる巖にかたかけて、肘折れ造りたる堂あり。観音を据ゑ奉れり。鏡臺とか云ふ外山に向ひて、」

「と云ふんですから、今の月見堂の事でせう。屹と此の岨の半腹にありませうよ。」

「其處の高欄におしかゝりながら、月を待つ間のお伽にとて、其の坊さんが話すのですが、藪原山の木賊刈、伏屋里の笏木、更科山の老桂、千曲川の細石、姨捨山の姥石なぞつて、標題ばかりでも、妙にあはれに、もの寂しくなるのです。皆此の邊の、山々谷々の事なんでせう。何にしろ、

信濃なる千曲の川のさゞれ石も

君しふみなば玉とひろはんと

言ふ場所なんですもの。ーー やあ、明るく成

つた。」

と思はず言つた。

釣ランプが、眞新しい、明いのに取換つたのである。

「お待遠様、……濟みません。」

「何ういたしまして、飛んだ御無理をお願い申して。」

女房は崩れた鬢の黒い中から、思ひのほか白い顔で莞爾して、

「私どもでは難有いんでございますけれども、まあ、何しろ、お月様がいらつしつて下さると可いんですけれども。」

爾時、一列に蒲鉾形に反つた障子を左右に開けるけると、ランプの——小村さんが用心に蔓を壓へた——灯が一燼、山氣が颯と座に沁みた。

「一昨晚の今頃は、二かさも三かさも大い、眞圓いお月様が、あの正面へお出なさいましてございませよ。あれがね旦那、鏡臺山でございませがね、何うも暗うございまして。」

「音に聞いた。どれ、」  
と立つと、ぐら／＼と成る……

「おつと。」  
欄干につかまつて、蝸牛と云ふ身で、背を縮めながら首を伸ばし、

「漆で塗つたやうに、ぼつと霧のかゝつた處は研

出したね。」

宵の明星が晃然と蒼い。

「あの山裾が、左の方へ入江のやうに擴がつて、ほんのり奥に灯が見えるでございませう。善光寺平でございましてね。灯のありますのは、善光寺の町なんでございますよ。」

「何里あります。」

「八里ございます。」

「はゝあ。」

「眞下の谷底に、ちら／＼と灯が見えませう、彼處が、八幡の町でございましてね、お月見の方は、那處から、皆さんが支度をなすつて、私どもの裏の山へお上りに成りますんでございしますがね。鏡臺山と、丁どさし向ひに成つて居ります。——おゝ、冷えますこと……唯今お火鉢を。」

「小村さん、寸法は分りました、何うなすつたんです、景色も見ないで。」

と座に戻ると、小村さんは眞顔で膝に手を置いて、  
「いえ、其の縁側に三人揃つて立つたんでは、棧敷が落ちさうで危険ですから。」

「眞個、これで猿樂があると、天狗が揺り

倒しさうな處です。可恐しいね」

と二人は顔を見合せた。

が、注文通り、火鉢に湯沸か天上して来た、火も赫と――此の火鉢と湯沸が、前に言つた正札つきなる眞新しいのである。酒も銚子だけ借りて、持參の一升壺の爛をするのに、女房は氣障だと言ふもせず。お客冥利に、義理にうどんを誂へれば、亂れてもすなほな銀杏返の鬢を振つて、

「およしなさいまし、むだな事でございます。おしちぢが悪くつて、めしあがられやしませんから。……何ぞお香のものを差上げませう。」

其の心意氣。

「難有い。」

と熱爛三杯、手酌でたてつけた顔を撫で、

「おかみさん。」

杯をづいとさして、

「一つ申上げませう、お知己に……」

「私は一向な不調法ものでございまして。」

「まあ一盞。」

「最う、全く。」

「でも、一盞ぐらゐ、お酌をしませう。」

と小村さんが銚子を持ったのに、左右に手を振つて、迂るやうに、然も軋んで遁げ下りる。

「何だい。」

「毒だとも思ひましたかね。して見ると、お互の人相が思はれます。おかみさん一人切なんでせうか知ら。」

「泊りませうか。」

「御串戯を。」

クイツ、キウ、クツク　ー　と・・・うら悲げに、また聞える。

「弱りました。あの狗には。」

と小村さんは又滅入つた。

のし／＼みしり、大皿を片手に、其處へ天井を抜きさうに、ぬいと顯れたのは、色の黒い、いが栗で、しるし半纏の上へ汚れくさつた棒縞の大廣袖を被つた、から脛の毛だらけ、圓體は大いが、身の緊つた、腰のしやんとした、鼻の隆い、目の光る・・・年の配は四十餘で、稼盛りの屈竟な山賊面・・・腰にぶツ込んだ山刀の無いばかり、あの皿は何んだ、ヘツヘツ、生首二個受取らうか、と言ひさうな、

が、そぐはないのは、頤に短い山羊髯であつた。

「御免なせえ．．．お香のものと、媽々衆が氣前を見せましたが、取つておきの此の奈良漬、此奴あ水ぼくて些と中ですが。菜ツ葉が食へますよ。長蕪てツて、此處等一體の名物で、異に食へまさ、めしあがれ。ー處で、媽々衆のことづけですががな。折角御酒を一つと申されたものを、やけな御辭退で、何だかね、南蠻秘法の麻痺藥．．．あの、それ、何とか傳三熊の膏藥とか言ふ三題噺を逆に行つたやうな工合で、旦那方の御酒に毒でもありさうな様子合が、申譯がございません。で、居候の私に、代理として一抔、いんえ唯一つだけ。おしるしに頂戴してくれるやうにと申すんで、や、も、御覽の通、不躑ながら罷出ました。實はね、媽々衆、あゝ見えて、浮氣もんでね、亭主は旅稼ぎで留守なり、此方のお若い方のやうな、おツこちが欲しさに、酒どころか、杯を禁つて居りますんでね。はッはッはッ。」

階子の下から、伸上つた聲がして、  
「馬鹿な事を言はねえもんだ。」

と、むきに成ると、まるで田舎なまり。

「眞鍮臺め。」と言つた。

「……眞鍮臺？……」

聞くと……眞鍮臺、またの名を銀流しの藤助と言ふ、金箔つきの鑄掛屋で、此が三味線の持ちぬしであつた。面構でも知れる……此のしたゝかものが、やがて涙ぐんで……話したのである。

「私はね、旦那。まだ其の時分、宿を取つちやあ居なかつたんでございます、居酒屋、と云つた處で、豆腐も駄菓子も突くるみに賣つて居る。天井に釣した蕃椒の方が、燈よりは眞赤に目に立つてツた、萎びた店で、榎同然の鯁に、山家片鄙はお極りの石斑魚の煮浸、衣川で噛しばつた武藏坊辨慶の奥齒のやうな奴をせりながら、店前で、やた一きめて居た處でございましてね。

一寸私の懐中合と、鑄掛屋風情の此の容體では、宿が取悪かつたんでございますよ。と云ふのが、焼山の下で、バツと一くべ、おへつゝる様を燃したも同じで、山を越しちやあ、別に騒動も聞えなかつたんでございますが、五日ばかり前に、其の温泉に火事がありました。ために、木賃らしい、此の方に柄相當のなんぞ焼けて居て、二三軒残つたのは、いづれも玄關附だから些とたじろいだ次第なんでございますが。

え、温泉でございますか、名は體をあらはすとか言ひます、とんだ山中で、……狼温泉。

「――」

「あ、何處か、三峰山の近所ですか。」

と、嘗て美術學校の學生時代に、其のお山へ拔重りをして、狼よりも旅費の不足で、したゝか可恐い思ひをした小村さんは、聞怯をして口を入れた……噛むが如く杯を銜みながら、

「那處ぢやあ、お狗様と言はないと山番に叱られますよ。」

藤助は眞顔で、微酔の頭を掉つた。

「途方もねえ、見當違ひ、山また山を遙に離れた、峰々、谷々……と言へばね、山の中に島々と、言ふ處がありませ、をかしいね。いやもつと、深い、松本から七里も探へ入つた、飛驒の山中――心細い處で……それでも小學校もありや、郵便局もありましたつけが、それなんぞも焼けて居たんでございましてね。」

山坂を踏越えて、少々平な盆地に成つた、其の温

泉場へ入りますと、火沙汰は又格別、．．．酷  
いもので、村はづれには、落葉、枯葉、焼灰に交つ  
て、ニ子鳥、頬白、山雀、鶇、小雀などゝ言ふ、紅  
だ、青だ、黄色だわ、紫の毛も交つて、あの綺麗な  
小鳥どもが、路傍にはら／＼と落ちて居る。此奴あ、  
それ、時節が今頃に成りますと、よく、此の信州路、  
木曾街道の山家には、暗い軒に、絲で編んで、ぶら  
下げて、美しい手鞠が纏れたやうに賣つてる奴だて。  
それが、お前さん、火事騒ぎに散らかつたんでー  
驚いたのは、中に交つて、鴛鴦が二羽．．．  
番かね．．．や、頂きます、ト、ト、ごせえ  
やさ。」  
と小村さんの酌を、蓋するやうな大な掌で請けな  
がら、  
「何うもね、捨つて抱きたいやうでがしたぜ。ま  
さか、池に泳いだり、樹に眠つたのが、火の粉を浴  
びはしますめえ。賣ものが散らばりましたか、眞紅  
に染つた木の葉を枕で、目を眠つて居ましたよ。」

天秤棒一本で、天井へ宙乗でもするやうに、ふら  
／＼ふら／＼、山から山を経歴つて．．．えゝ

丁ど昨年さくねんの今月こんげつ、日は、もつと末すゑへ寄よつて居をりまし  
たが――此この緋葉もみぢの眞最中まっさいちゆう、草くさも雲くもも虹にじのやう  
な彩色さいしきの中なかを、飽あくほど視みて通とほつた私わつしもね、此これには  
足あしが停とまりました。

如何なんと・・・・綺麗きれいな、其その翼つばさの上うへも、一重へし敷し  
いて、薄うすりと白しろく成なりました。此この景色けしきに舞臺ぶたいが換かは  
つて、雪ゆきの下したから鴛鴦をしどりの精靈しやうりやうが、鬼火おにびをちら／＼と  
然もしながら、すつと糶上せりあがつたやうにね、お前まへさ  
ん・・・・唯今たゞいまの、其その二人ふたりの婦をんなが、私わつしの目めに映うつ  
りました。凄すこいやうに美うつくしうがした。」

鑄掛屋いかけやは、肩かたを軟やはらかに、胸むねを低ひくうして、更あらためて私わたした  
ち二人ふたりを視みたが、  
「で、山路やまぢへ掛かる、狼温泉おほかみおんせんの出口でぐちを通とほるんでござ  
います、場所ばしよはソレ件くだんの盆地ぼんちだ。私わつしが飲のんで居あま  
した有合御肴ありあはせおさかなと言いふお極きまりの一膳ぜんめしの前まへなんざ、  
小ちひさな原場はらつばぐらゐ小廣こひろうございますのに――そ  
れでも左右さいうへ並ならばないで、前後あとさきに成なつて、すつと連つれ  
立たつて通とほります。

前へ立つたのは、蓑を着て、竹の子笠を冠つて居ました。……端折つた片褸の友染が、藁の裾に優しくこぼれる、稲束の根に嫁菜が咲いたと言つた形。ふつさりとした銀杏返が耳許へばらりと亂れて、道具は少し大きうがすが、背がすらりとして居るから、其の眉毛の濃いのも、よく釣合つて、抜けるほど色が白い、些と大柄ではありますが、如何にも體つきの婀娜な婦で、

「今晚は。」

と、通掛りに、めし屋へ聲を掛けて行きました。が、**■**と燃えて居る松明の火で、おくれ毛へ、恚う、雪の散るのが、白い、其の頬を殺ぐやうで、鮮麗に見えて、いた／＼しい。

いた／＼しいと言へば、其がね、素足に上草履。あの、旅店で廊下を穿かせる赤い端緒の立つた奴で、  
ー しつとりと些と沈んだくらゐ落着いた婦な  
んだが、實際其の、心も空に成るほど氣の揉めるわけがあつてー 思ひ掛けず降出した雪に、足駄でなし、草鞋でなし、中ぶらりに右のつゝかけ穿で、ストーンと落ちるやうに、旅館から、上草履で出たと

見えます。……其の癖、一生の晴着と言ふので、母さん譲りの裙模様、紋着なんか着て居ました。

お話をしますうちに、仔細は追々おわかりに成りますが、――此が何でさ、二葉屋と言つて、土地での、先づ一等旅館の女中で、お道さんと言ふ別嬪、以前で申せば湯女なんだ。」

いや、湯女に見惚れて居て、肝心の御婦人が後れました。最一人の方は、山茶花と小菊の花の飛模様のコオトを着て、白地の手拭を吹流しの――妙な拵だと思へば……道理こそ、降りかゝる雪を厭うたも。お前さん、いま結立と見える高島田の水の滴りさうなのに、對に照つた鼈甲の花笄、花櫛――此の拵ぢやあ、白襟に相違ねえ。お化粧も濃く、紅もさしたが、何故か顔の色が透き通りさうに血が澄んで、品のいゝのが寂しく見えます。華奢な事は、吹つけるほどではなくても、雪を持った向風にや、傘も洋傘も持切れまずめえ、被りもしないで、湯女と同じ竹の子笠を胸へ取つて、襟を伏せて、俯向いて行きます。……袖の下には、お

位牌を抱いて葬禮の施主に立つたやうで、恚う正しく端然とした處は、視る目に、神々しうございます。何となく容子が四邊を沈めて、陰氣だけれど、氣高いでございますよ。

同じ人間もな。・・・鑄掛屋を一人土間で呷らして、納戸の炬燵に潜込んだ、一ぜん飯の婆々媽々など言ふ徒は、お道さんの「今晚は。」に唯、「ふわ、」と言つた切だ。顔も出さねえ」其の「ふわ、」がね、何の事アねえ、鼠の穴から古綿が千斷れて出たやうだ。」

「些と耳が疼いだな。」  
と餛飩屋の女房が口を入れた、——女房は、鑄掛屋の話に引かれて、二階の座に加はつて居たのである。

「其のやはり大まかなものだよ。店の客人が、飲さしの二合壇と、最う一本、棚より引接つて、此奴を、井へ突込んで、少時して、婦人たちのあとを追つてぷらりと出て行くのに、何とも言はねえ。山は深い、旦那方のおつしやる、それ、何とかつて、山

中曆日なしぢやあねえ、狼温泉なんざ、いつもお正月で、人間がめでゝえね。」

「はゝあ。」

「成程。」

私たちは、そんな事は徒に聞いて、さきを急いだ。

「荷は何うしたよ。」

と女房が笑つて言つた。

「ほい忘れた。いや、忘れたんぢやあねえ、一せ

ん飯に置放しよ。」

「それ見たか、あんな三味線だつて、壇詰、二升

ぐらゐな値はあるでござんさあ、なあ、旦那方。」

「うむ、眞個な。」

と藤助は額を壓へて、

「おめでゝえのは此方だつて、はッはッはッ。」

四

「さて、旦那方、洒落や串戯ぢやあねえんでござ  
 います。．．．．．御覽の通り人間の中の變な聾の  
 やうな、こんな野郎にも、不思議なまはり合せで、  
 其の婦たちのあとを尾けて行かなけりや成らねえ一  
 役ついて居たのでございましてね。．．．．．乗掛  
 つた船だ。鬱陶しくもお聞きなせえ。」

すつとこ被りで、  
 襟を敲いて、

「どんつくで出ましたわ。．．．．．見えがくれに  
 行く段取だから、急ぐにや當らねえ。別して先方は  
 足弱だ。はてな、此處等に色鳥の小鳥の空蝉、鴛鴦  
 の亡骸と言ふのが有つたつくと、酒の勢、雪なんざ  
 苦に成らねえが、赤い鼻尖を、頬被から突出して、  
 へつぴり腰で嗅ぐ工合は、夜興引の爺が穴一のばら  
 錢を探すやうだ。餘計な事でございませうがねー  
 性が知れちや居ましても、何だか、婦の二人の姿  
 が、鴛鴦の魂がスツと拔出したやうでなりませんや。」

此の邊だつくと、今度は、雪まじりに鳥の羽より焼  
屑が堆い處を見着けて、お手向にね、壇の口からお  
酒を一掬と思ひましたが、待てよと私あ考へた、正  
覺坊ぢやアあるめえし、鴛鴦が酒を飲むやら、飲ね  
えやら、一層の事だと、手前の口へね、喇叭と遣つ  
た………恚うすりや鳥の精がめしあがると同じ  
事だ………何しろ腹中は鴛鴦で一杯でござ  
いました。」

女房が肥つた膝で、疊に當つて、

「藤助さんよ。」

「あゝ。」

「酒の話ぢやあないぢやあないかね、ねえ、旦那  
方。」

「何しろ、其處で。」

と、促せば、

「と二人は最う雑木林の崖に沿つて、上りを山路  
に懸つてゐます。白い中を、ふつ／＼と、眞紅な鳥  
のたつやうに、向うへ行く。………一軒、家だ  
か、穴だか知れねえ、穢多、非人の住んで居さうな、

引傾いだ小屋に、筵を二枚ぶら下げて、此奴が戸に  
成る・・・横の羽目に、半分ちぎれた浪花節の  
點片がめら／＼と動いて居るのがありました、其が  
宿はづれで、最う山に成ります。峠を越すまで、  
當分のうち家らしいものはございませんや。

水の音が聞えます。ちよろ／＼水が、青いやうに  
冷く走る。山清水の小流のへりについてあとを慕ひ  
ながら、いゝ程合で、透かして見ると、坂も大分急  
に成つた石二道で、誰がどつちのを解いたか、扱帯  
をな、一條、湯女の手から後に取つて、其を其の少  
い貴婦人てつた高島田のが、片手に控へて縋つて居  
ます。最う笠は外して脊へ掛けて  
絞の紅いのがね、松明が揺れる度に、雪に薄紫に颯  
と冴えながら、螺旋の道條に恚う蜿ると、其の毎に、  
崖の朱葉がちら／＼と映りました、夢のやうだ。

視る奴の方が夢のやうだから、御當人たちは現か  
も知れねえ。

で其の二人は、然うやつて、雪の夜道を山坂かけ  
て、何處へ行くんだと思召す。

此處にて　――　旦那。

藤助は息繼にニと呷つて、

「此の二階から、鏡臺山を　――　」少し薄明りが射しますぜ、月が出ませう。まあ、御緩りなさいまし、――　それ、恚うやつて視るやうに、狼温泉の宿はづれの坂から横正面と言つた、肩で恚う捻向いて高く上を視る處に、耳はねえが、あのトランプのハアト形に頭を押立つた梟ヶ嶽、梟、梟と一口に稱へて、何嶽と言ふほどぢやあねえ、丘が一座、其の頂邊に、天狗の撞木杖と言つた形が見える、柱が一本。  
風の吹まはしで、松明の尖がぼつと伸びると、白く成つて顯れる時は、耶穌の看板の十字架でつた奴にも似て居る　こりや、もし、電信柱で。

蔭に隠れて見えねえけれど、其處に一張天幕があります。何だと言ふと、火事で焼けたがために、假ごしらへの電信局で、温泉場から、其處へ出張つて居るのでございます。

其處へ行くんだね、婦人二人は。

で、其の郵便局の天幕の裡に、此の湯女の別嬪が、  
生命がけ二年越に思ひ詰めて居る技手の先生、  
・ ・ ・ と最う一人は、上州高崎の大資産家の若旦那  
で、此の高島田のお嬢さんの婿さんと、其の二人が、  
いはれあつて、二人を待つて、對の手戟の石突をつ  
かないばかり、洋服を着た、毘沙門天、増長天と言  
ふ形で、五體を締めて、殺氣を含んで、呼吸を詰め  
て、待構へて居るんでがしてな。

お嬢さんの方は、名を縫子さんと言ふんで、申さ  
ずとも娘ツ子ぢやありません、こりや御新姐。  
・ ・ ・ ぢやあねえね。 - - 若奥様。 -

五

峰の白雪、麓の氷、

今は互に隔てゝ居れど、

やがて嬉しく、溶けて流れて、

あふのぢやわいな。

「私は日暮前に、其の天幕張の郵便局の前を通つて来たんでございますよ。．．．．．丁ど狼の温泉へ入込みます途中でな。．．．．．晩に雪が来ようなどとは思ひも着かねえ、小春日和と言つた、ぼか／＼した好い天気。．．．．．」

尤も、甲州から木曾街道、信州路を掛けちやあ、麓の岐路を、天秤で、てく／＼で、路傍の木の葉かね、あれ性の、いゝ女の、ぼうと成つて少し唇の乾いたと言ふ容子で、へりを白くして、日向にぼか／＼して居て、草も乾燥いで、足のうらが擦つてえ、と言つた陽気で居ながら、槍、穂高、大天井、やけに焼ケ嶽などゝ言ふ、大薩摩でもの凄いのが、雲の上に重つて、天に、大波を立てゝ居る、．．．．．

裏の峰が、忽ち颯と暗く成つて、雲が被つたと思ふ  
と、蓑で煽るやうに前の峰へ蛭りを立てゝあぴせ掛  
けると、浴びせて置いて晴れると思へば、其の裏の  
峰が最う晴れた處から、ひだを取つて白く成ります。  
見る／＼うちに雪が掛るんでございましたね。左右  
の山は、紅く成つたり、黄色かつたり、酔つたり、  
醒めたりして、移つて来る其のむら雲を待つて居る。

と言つた次第で、雪の神様が、黒雲の中を、大な  
袖を開いて、虚空を飛行なさる姿が、遠くの其の日  
向の路に、蠡斯ほどの小さな旅のものに、あり／＼  
と拝まれます。

だから、日向で汗ばむくらみだと言つた處で、雑  
樹一株隔てた中には、草の枯れたのに、日が映すか  
と見れば、何、瑠璃色に小さく凝つた龍膽が、日中  
も冷たい白い霜を噛んで居ます。

が、陽の赤い、其の時梟ヶ獄は、猫が日向ぼっこ  
をしたやうな形で、例の、草鞋も脚絆も擦つて  
え。．．．．満山のもみぢの中に、もくりと一つ、

道も白く乾いて、枯草がぼか／＼する。．．．．  
芳しい落葉の香のする日の影を、まともに吸つて、  
くしやみが出さうなのを獅噛面で、

「鑄掛．．．．錠前の直し。」

すくツと立つた電信柱に添つて、片枝折れた松が  
一株、岨へのしかつて立つて居ます。天幕張だら  
うが、掘立小屋だらうが、人さへ住んで居れば家業  
冥利．．．．

「鑄掛．．．．錠前の直し。」

と、天幕と其松のあります。一寸小高く成つた築  
山てつた下を．．．．温泉場の屋根を黒く小さく  
下に見て、通りが／＼に、じろり。．．．．

藤助は、ぎよろりとしながら、頬邊を平手で敲い  
て、

「此の人相だ、お前さん、じろりとよりか言ひや  
うはねえてね、ト行つた時、はじめて見たのが湯女  
の其の別嬪だ。お道さんは、半襟の掛つた縞の着も  
のに、前垂掛、晝夜帯、若い世話女房と言つた形で、  
其の髪の毛のいゝ、垢抜のした白い顔を、神妙に俯向い  
て、粗末な椅子に掛けて、卓子に凭掛つて、足袋を

繕つて居ましたよ、紺足袋を……

「鑄掛……錠前の直し。」

一寸顔高を上げて見ましたつけ。直に、ちつと足袋を刺すだて。

動いたゞけに尚ほ活きて、光澤を持った、きめの細な襟脚の好きなんと言つちやねえ。……通り切れるもんぢやあねえてね、お前さん、雲だか、風だか、ふら／＼と野道山道宿なしの身のほまちだ。

一言ぐらゐ口を利いて澁茶の一杯も、あのお手からと思ひましたがね、ぎよつとしたのは半分焦げたなりで天幕の端に眞直に立つた看板だ。電信局としてある……

茶屋小屋、出茶屋の姐さんぢやあねえ。風俗は此の目で確に睨んだが おや／＼、お役人の奥様がかい。……郵便局員の御夫人かな。

此が旦那方だと仔細ねえ。湯茶の無心も雑作はね

え。西行法師なら歌をよみかける處だが、山家めぐりの鑄掛屋ぢやあ道を聞くのも跋が變だ。

處で、椅子はまだ二三脚、何だか、此方人等にや分らねえが、ぴか／＼機械を据附けた卓子が最う一臺。向つてきちんと椅子が置いてあるが、役人らしいのは影も見えねえ。

はゝあ来る道で、向の小山の土手腹に傳はつた、電信の綱線の下あたりを、木の葉の中に現て、茶色の洋服で棒のやうなものを持つて、毛蟲が動くやうに小さく歩行いて居る形を見た。……鐵砲打の鳥おどしかと思つたが、大きにそんなのが局員の先生で、此の姉さんの旦那かも知れねえよ。が何しる留守だ。

「鑄掛……錠前の直し。」

……と崖ぶちの日向に立つたが、紺足袋の繕ひ。……雪の襟脚、白い手だ。悚然とするほど身に沁みてなりませんや。

遙に見える、高山の、かげつて桔梗色したのが、  
すつと雪を被いで居るにつけても。で、其處へ先づ  
荷をおろしました。

「や、えいとこさ。」と、草鞋の裏が空へ翻るま  
で、山端へどつしりと、暖い木の葉に腰を落しした。

間拍子も機かけも渡らねえから、ソレ向うの嶽の  
雪を視ながら、

「あゝ、降つたる雪かな。」

とか何とか、うる覚えの獨言を一言つてね、お前さ  
ん、

「それ、雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴裳  
を着て立つて徘徊すと言へりか。」

なんのツて、ひら／＼と來る紅色の葉から、すぐ  
に吸ひつけるやうに煙草を吹かした。が、何分にも  
鑄掛屋ぢやあ納りませんな。

處でさて、首に巻いた手拭を取つて、拂いて、馬  
士にも衣裳だ、吉原かぶりと氣取りましたさ。古三  
味線を、チンとかツンとか引搔鳴らして、此處で、  
内證で唄つた奴でさ。

峰の白雪、麓氷——

旦那、顔を見つこなし……極が悪い……  
・何と、もし、これで別嬪の姉さんを引寄せよう  
と言ふ肚だ、をかした肚だ、狸の肚だね。

だが、此奴あ此方人等徒の、即ち狸の腹鼓と言ふ  
甘術でね。不氣味でも、氣障でも、何でも、聞く耳  
を立てるうちに。うか／＼と釣出されずにや居ねえ  
んだね。伺うですえ、……それ、來ました。」  
と不意に振向く、階子段の暗い穴。

小村さんも私も悚然した。

女房は尚の事……

「あれ、吃驚した。」

と膝で摺寄る。

藤助は一笑して、

「先づは、此の寸法でございましてね、お道さん  
を引寄せた上合と云ふのが、あはツはツ。」

「見ない振り、知らない振り、雪の遠山に向い

て、．．．．溶けて流れてと、唄つて居ながら、  
 後方へ来るのが自然と分るね、鹿の寄るのは違ひ  
 ますひ．．．．別嬪の香がほんのりで、縹緞に打  
 たれて身に染む工合が、温泉の女神様が世話に碎け  
 て顯れたやうでございましたぜ。．．．．「逢ひ  
 たさに見たさに」何とか唄つて、チヤンと句切ると、

「あの、鑄掛屋さん。」

と、初音だね。

視ると、朱塗の盆に、急須、茶碗を添へて持つて  
 居る。黒緇子の引掛帯で、淺葱の襟の其の様子が何  
 とも言へねえ。

いえ、最一つ、盆の上に、紙に包んだ蝶々と言ふ  
 のが載つて居ました。．．．．其がために讚める  
 んぢやあねえけれど、拵へねえで、なまめいたもん  
 でしたぜ。人を喰つた此方の吉原かぶりなんざ、も  
 の欲しさうで極りが悪くなつたくらゐで。

「へい、へい、へい、こりや奥様、恐入りまし

た。「と故とらしくも、茶碗をな、兩手で頂かずにや居られなかつた。

姐さんが、初々しい、しをらしい事を、お聞きなせえ、ぼうつと成つて、

「まあ、あんな事、私は奉公人なんですよ。」  
さ、其の奉公人風情が、生意氣のやうだけれど、唄をもう一つ唄つて聞かしてもらへまいか、と言ふんぢやありませんかい。お詔が注文にはまつた。こんな處でよろしければ、山で樹の數、幾つだつて構やあしませんと、  
奥山ずまひ、戀もりん氣も忘れて居たが、  
・・で御機嫌を取結ぶと、それよりか、矢張り、先の「やがて鱧しく溶けて流れて合ふのぢやわいな」の方を聞かして欲しいと、山姫様、御意遊ばす。」

藤助は杯で一寸句切つて、眉も口も引緊つた。

「旦那方の前でございませがね、恚う中腰に、締加減の好い帶腰で、下に居て、白い細い指の先を、染めた草につくやうにして熟と聞く。・・・聞手が、聞手だ。唄ふ方も身につまされて、此でもお

前さん、人間交際もすりや、女出入も知らねえぢやあねえ。少い時を思ひ出して、何となく、我身ながら引入れられて、……覚えて、つひぞねえ、一生に一度だ。較いべものにはあ成りませんが、むかし琵琶法師の名譽なのが、こんな處で草枕、山のかみさま神様に一曲奏でた心持。

と姐さんが、とけて流れて合ふのぢやわいなと、きゝ入りながら、睫毛を長くうつむいて、ほろりとした時、此方も思はず、つい、ほろり……いえさ、此の面だからポタリと出ました。」  
と口では言ひつゝ、聲が濕つた。

「つかん事を聞きますけれど、鑄掛屋さん、錠の合鍵を頼まれて下さいますか。」……と姐さんがね。

私の此を聞いて、ボンと両手を拍つた。  
此のくらあつく事は、私の唄が三味線につくやうなもんぢやあねえ。

「鍵が狂つたんでございますかい。」

「いゝえ、無いんですけれど。」

「造作はがアせん、煙草三服飲む間だ。」

其處で錠前を見て、と言ふ事に成ると、些と内證事らしい。……しとやかな姐さんが、急に何だか、そはついて、彼方此方ニしましたが、高い處に恚う立つと、風が攫つて、すつと、雲の上持つて行きさうで危かしいやうに見えます。

勿論人影は、ぼつとりともない。

が、其でも、天幕の正面からぢやあ、氣咎めがしたと見えて、

「濟みませんが、此方から。」

裏へ廻はると、綻びた處があるので。……姐さんは科よく消えたが、此方は白雷也の妖術にアリヤノ、だね。列子と言ふ身で這込みました。が、それ處ぢやあねえ。此の錠前だと言ふのを一見に及ぶと、片隅に立掛けた奴だが、大蝦蟆の干物とも、河馬の木乃伊とも譬へやうのねえ、萎びて突張つて、兀斑の、大古物の大かい革靴で。

此奴を、古新聞で包んで、薄汚れた兵兒帶でぐる

／＼と巻いてあるのだが、結びめは、はづれて緩んで、新聞もばさりと裂けた。其處からそれ、煤を噴きさうな面を出して、蘆の莖から谷覗くと、鍵の穴を眞黒に窪まして居るぢやアありませんか。

「何が入つて居りますえ。」

失禮な・・・人様の革靴を・・・だが、

私あ、ツイうつかり言つた。

「あの、旦那さんのお大事なものばかり。」

「へい、貴女の旦那様の？」

「いゝえ、技師の先生の方ですが、其の方のお大事なものが残らず、お國でおかくれに成りました奥様のお骨も、唯たお一人ツ子の、かけがへのない坊ちやまのお骨も、此の中に入つていらつしやるんですつて。」

と、恚う言ふんでね。」

小村さんと私は、黙つて氣を引いて瞳を合した。

籐助は一息ついて、

「其を聞いて、安心をしたくらゐだ。技師の旦那

の奥様と坊ちやまのお骨と聞いて、安心したも、をか  
かしたものでございますがね、<一>軒家の化葛籠  
だ、天幕の中の大革靴ぢやあ、中に何が入つてるか  
薄氣味が悪かつたんで。

「へい、其の鍵をおなくしなすつた……其  
奴はお困りで、」

と錠前の寸法を當りながら、恚う見ますとね、新  
聞のまだ残つた處に、青錆にさびた金具の口でひし  
めた革靴の中から、紫の袖が一枚。……

袂が中に、袖口をすんなり、白羽二重の裏が生々  
と、女の膚を包んだやうで、被た人からも思はる、  
裏が通つて、揚羽の蝶の袖の紋がちら／＼と羽を動  
かすやうに見えました。」

小村さんと私とは、じつと見合つて居たまゝの互  
の昏がぶる／＼と震へたのである。

「實はこの時から數へて前々年の秋、おなじ小  
村さんと、（連が最う一人あつた。）三人連で、  
輕井澤、碓氷のみぢを見た汽車の中に、まさしく  
間違ふまい、此に就いた事實があつて、私は、不束  
ながら、はじめ、淑女畫報に、。革靴の怪。後  
に。「片袖。」と改題して、小集の中に編んだ一篇  
を草した事がある。

確かに紫の袖の紋も、揚羽の蝶と覺えて居る。高島  
田に花笄の、盛装した嫁入姿の窈窕たる淑女が、其  
の嫁御寮に似もつかぬ、卑しげな險のある女親まじ  
りに、七八人の附添とゝもに、深谷驛から同じ室に  
乗組んで、御寮は丁ど私たちの眞向うの席に就いた。  
將に嫁がんとする娘の、嬉しさと、恥らひと、心遣  
と、恐怖と、笑と、涙とは、其のまゝ膝に手を重ね  
て、つむりを重たげに、たゞ肩を細く、さしうつむ  
いた黒髪に包んで、顔も上げない。まことにしとや  
かな住人であつた。

此の片袖が、鄰席にさし置かれた、他の大革靴の口に挟まったのである。……失禮ながら、其の革靴は、こゝに藤助が饒舌のと、略大差のないものであつた。

が、持ぬしは、意氣沈んで、髯、髪もぶしやうにのび、面も憔悴はして居たが、素純にして、然も謹嚴なる人物であつた。

汽車の進行中に、此の出来事が発見された時、附添の騒ぎ方は……無理もないが、思はぬ粗相であらう、失策した人物に對して、傍の見る目は寧ろ氣の毒なほどであつた。

一も二もない、したゝかに詫びて、其の革靴の口を開くので、事は決着するに相違あるまい。

我も人も、しかあるべく信じた。

然るにもかゝはらず、其の人物は、人々が騒いで掛けた革靴の手の中から、するりと握拳の手を抜くと齊しく、列車の内へすつくと立つて、日に焼けた面は瓦の黄昏るゝ如く色を變へながら、決然たる態

度で、同室の御婦人、紳士の方々、と室内に向つて、  
掠聲して言つた、・・・此なる、窈窕たる淑女  
（――私もこゝに其の人物の言つた言を、其の  
まゝ引用したのであるが、）窈窕たる淑女のはれ着  
の袖を侵したのは偶然の粗相である。はじめは旅行  
案内を掴出して、それを投込んで錠を下した時に、  
うつかり挟んだものと思はれる。が、それを心着い  
た時は、――と云つて垂々と額に流るゝ汗を拭  
つて――唯一瞬間に千萬無量、萬劫の煩惱を起  
した。如何に思ひ、如何に想つても、此の窈窕たる  
淑女は、正しく他に嫁せらるゝのである・・・  
ばかりでない、次か、或は其の次の停車場にて下車  
なさるゝとゝもに忽ち令夫人と成らるゝ、其の片袖  
である。自分は生命を掛けて戀した、生命を掛くる  
のみか、罪はまさに死である、死すとも此の革靴の  
片袖は敢て離すまいと思ふ。思ひ切つて鍵を棄てま  
した。私は此の窓から、遙に北の天に、雪を銀欄の  
如く刺繍した、あの遠山の頂を望んで、殆ど無邊際  
に投げたのです、と言つた。

――汽車は赤城山を其の巽の窓に望んで、廣漠た

る原野の末を貫いて居たのであつた。――

渠は電信技師である。立野龍三郎と自ら名告つた。渠は固より兩親も何もない、最愛の兒を失ひ、最愛の妻を失つて、世を果敢むの餘り、其の妻と子の白骨と、ともに、失ふいべからざるものゝ一式、餘さず此の古革靴に納めた、寧ろ我が身孤の榮然たる影をも納めて、野に山に棄つるが如く、絶所、僻境を望んで飛驒山中の電信局へ唯今赴任する途中である。已に我身ながら葬去つた身は、こゝに片袖とゝもに蘇生つた。蘇生ると同時に、罪は死である。否、死は尚ほ容易い、天の咎、地の責、人の制規、如何なる制裁と雖も、甘んじて覚悟して相受ける。各位が、我がために刑を選んで、其の最も酷なのは、磔でない、獄門でない、牛裂の極刑でもない。此の片袖を挟んだ古革靴を自分にぶら下げさせて、嫁御寮のあとに犬の如く従はせて、其まゝ今日の婿君の脚下に拝し跪かせらるゝ事である。諾、その嚴罰を蒙りませう、斷じて自分は此の革靴を開いて片袖は返さぬのである。唯、天地神明に誓ふのは、貴女の淑徳と貞潔である。自分は生れてより今に及んで、其の姿

を視たのは僅に今より前、約三十分に過ぎない、  
包ましくさしうつむかれた淑女は、  
申すまでもなく、自分に向つて瞳をも動かされなかつた事を保證する、  
—— 謹んで斷罪を待ちます。  
…… 各位。

啾々として、然も沈着に、純眞に、縷々此の意味の數千言を語つたのが、轟々たる汽車の中に、恰も雷鳴を凌ぐ、深刻なる獨白の如く私たちの耳に響いた。

附添の數多の男女は、或は怒り、或は罵り、或は呆れ、或は呪詛つた。が、狼狽したのは一様である。車外には御寮を迎の人数が満ちて、汽車は高崎に留まらうとしたのであるから

既に死灰の如く席に復して瞑目した技師が其の時再び立つた。こゝに手段があります、天が命ずるにあらず、地が教ふるにあらず、人の知れるにあらず、唯何ものゝ考慮とも分らない手段である。  
即ち小刀を以て革靴を切開く事なのです。  
……

私は拒みません。刃ものは持合せました、と云つて、  
鞆をパチンと抜いて渡したのを、あせつて震へる手  
に取つて、險相な女親が革鞆の口を切れかうとして、  
吃と猜疑の瞳を技師に向くると同時に、大革鞆を、  
革鞆のまゝ提げて、其のまゝ下車しようとして時で  
あつた。

「否！」

と一言、其の窈窕たる淑女は、袖つけを犇と取つ  
て、ぶり／＼と引切つた。緋の長襦袢が燈と燃える、  
片身を火に焼いたやうに衝と汽車を出た其の姿は、  
却つて露の滴る如く、おめき集ふ群集は黒煙に似た  
のである。

技師は眞俯向けに、革鞆の紫の袖に伏した。

乗合は喝采して、萬義の聲が哄と起つた。

汽車の進むがまゝに、私たちは窓から視た。人数  
に抱上げらるゝやうに成つて、やゝ亂れた黒髪に、  
雪なす小手を翳して此方を見送つた半身の紅は、美  
しき血を以て描いたる煉獄の女精であつた。

碓氷うすひの秋あきは寒さむかつた。

藤助は語繼いだ。

「姐さんが、然うすると……驚いたやうに、

「あれ、其を見ちや不可ません。」

「やあ、つい粗相を。」

と、何事も御意のまゝ、頭をすくめて恐縮をしますとね、低聲に成つて氣の毒さうに、

「でも、あの、然う云ふ私が、密と出して、見たいんでございます。」

「其處で鍵が御入用。」

「えゝ、ですけど、人様のものを、お許しも受けないで、内證で見ても悪うございませうねえ。」

「何、開けたら又閉めて置きやあ、何でもありやしませんや。」

と其の容子だもの、お前さん、何だつて構やしません。——お手輕様に言つて退けると、口に袖をあてながら、うつかり釣込まれたやうな様子でね、また前後を視ましたつけ。

「では、一寸今のうち振出蛸崩さん、あなたお職柄で鍵を拵へるより前に、手で聞けるわけには参りませんの。」

ぶる／＼ぶる．．．私あ、頭と嘴を一所に振つた。旦那の前だが、．．．指を曲げて、口を押へて、瞼へ指の環を當がつて、もう一度頭を掉つた。それ、鍵の手は、内證で遣つても、忽ちお目玉．．．不可えてんだ、お前さん。

「御法度だ。」  
と重く持たせて、

「ではござれども、姐さんの事だ、遣らかしやせう、大達引。奥様のお記念だか、何だか知らねえ。成程此奴あ、其のな、ヘツヘツ、誰方かに向つての姐さんの心意氣では．．．お邪魔に成るでございませうよ。奥齒にものが挟まつたつて譬は此だ。すつぱり、打開けてお出しなせえまん。」

「いえ、あの、開けて出すよりか、私が中へ入りたい。」

と仇氣なく莞爾すら、テエーしたもんだ。

「御串戯で、中へ入ると、恐怖え、其の亡くなつた奥さんの骨があるんぢやありませんかい。」

「もう、私は、あの、奥さまの、其の骨に成りたいの。」

「あれ、其の骨に成りたいか、いや、其の骨で此方は海月だ、ぐにやりと成つた。」

「御勝手だ。」

「あれ、そのかはりに奥さまが、活きた私にお成んなさる、容色は、たとへこんなでも。」

「御勝手だ。いや、御法度だね。」

「そんな事を言はないで、後生ですから、鑄掛屋さん。」

「開けますよ。だがね……」

と、一つ勿體で、

「此奴あ口傳だ、見ちや不可え、目を瞑つて居ておくんなさい。」

「はい。」

「最つと。」

「はい。」

「不可え／＼、薄目を開けてら。」

「まあ、では後を向きますわ。」

「引しまつて、ふつくりと柔かで、あゝ、堪らね

え腰附だ。」

「可厭．．．．．知りませんよ。」

と向直ると、串戯の中にしんみりと、

「あれ、一寸待つて下さいまし。いま目をふさい

で考へますと、お許がないのに錠前を開けるのは、

何うも心が濟みません。神様、佛様に、誓文して、

悪い心でなくつても、よくない事だと存じます。」

私も眞面目にうなづきました。

「でも、合鍵は拵へて下さいまし、大事にそれを  
持つて居て、．．．．．出来るだけ我慢はしますけ  
れども、何うしても開けたくつてならなくなりまし  
た時に、生命にかへても、開けて見たうございます  
から。」

脚を仰向いて、下の温泉だと云ひますとね、二葉屋  
晩の泊は何處だつて聞きますから、向うの峰の日

の女中だと、こゝで姐さんが名を言つて、お世話しませうと、きつい發奮さ。

御旅館などは勿體ねえ、此方人等式がと木賃がると、今頃はからあきで、人氣がなくなつて寂しいくらい。でも、お一方——昨日から、上州高崎の方ださうだけれど、東京にも少からう、品のいゝ美しい、お嬢さんだか、夫人だか、少い方がお一方、……」

「お一方？」

と、うつかり訊いて私は膝を堅うした。——

小村さんも同じ思ひは疑ひない。——あの時、其の窈窕たる御寮が、汽車を棄てたのは、彼處で、其の高崎であつた。

「然やうで。——お一方御逗留、おさみしさうな其の方にも、いまの立山が聞かせたいと、何となく其のお一方が、以ての外氣に成るやうで、妙に眉のあたりを暗くしましたつけ、熟と日のかげる山を視めたが、

「あゝ。鑄掛屋さん。」

と慌しい。．．．．皆まで開かずと飲込んだ、  
旦那様歸り引と．．．．こゝらは鵜だてね、天幕  
の逢目をひよこりと出た。もとの山端へ引退り、然  
らば一服仕らう．．．．つき置の茶の中には、松  
の落葉と朱葉が一枚。

「あゝ、腹が減つた．．．．」  
と色氣のない聲を出して、どかりと椅子に掛けたの  
は、焦茶色の洋服で、身の緊つた、骨格のいゝ、中  
古の軍人と云つた技師の先生だ。――言ふまで  
もなく、

立野龍三郎は渠である。――  
「減つた、城つた、無茶に減つた。」  
と、いきなり卓子の上の風呂敷包みを解くと、中  
が古風にも竹の子辨當。．．．．御存じはござい  
ますまい、三組の食籠で、疊むと入子に重る奴でね。  
案ずるまでもありませんや、お道姐さんが心入のお  
手料理か何かを、旅館から運ぶんだね。

「うまい、あゝ旨い、此の竹輪は骨がなくて難有

い。」  
「餘り旨さうなので、此方は里心が着きました。建  
場々々で飲みますから、滅多に持出し事のない仕込  
の片餉、油揚げの煮染に澤庵と言ふのを、もく／＼と  
頬張りはじめた。」

「お道さんが手拭を疊んで一寸帯に挟んだ、茶汲女  
と言ふ姿で、湯呑を片手に、半身で立つて私の方を  
視ましたがね。」

「旦那様……あの、鑄掛屋さんが、お辨當  
を使ひますので、お茶を御馳走いたしました。・  
・・お盆がなくて手で失禮でございます。」

と湯氣の上る處を、卓子の上へ置くんでございま  
すがね、加賀の赤繪の金々たるものなれども、  
湯呑は嬉しい心意氣だ。」

「何、鑄掛屋。」

と、何だか、氣を打つやうに言つて、先生、扁平  
い肩で捻ぢて、私の方を覗きました、

「やあ、御馳走はありますか。」

とかすれ笑ひをしなさるんだ。

「へつ、へつ。」

と、先はお役人様でがさ、お世辭笑をしたばかりで、此方も肩で捻向く面だ、道陸神の首を着換へたと言ふ形だてね。

「旨い。」

姐さんが嬉しさうな顔をしながら、「あの、電信の故障は、直りましてございますか。」

「うむ、取拂つたよ。」

と頬張つた含聲で、

「思つたより餘程さきだつた。」

はゝあ、電線に故障があつて、障るものゝ見當が着いた處から、先生、山めぐりで見廻つたんだ。道理こそ、いまし方天幕へ戻つて来た時に、段々塗の旗竿を、北極探検の浦島と云つた形で持つて居て、かたりと立掛けて入んなすつた。

「用うかなつて居ましたの。」

「變なもの……何、くだらないものが、線

の途中に引搦つて………」

カラリと箸を投げる音が響いた。

「うむ、来た。……トーン、トーン……」

・・可し。」

お道さんの聲で、

「旦那様、何ぞ御心配な事ではございませんか。」

一口がぶりと茶を飲んで、

「詰らぬ事を……他所へ来た電報に、一一々

一いちノ、氣を揉んで居て堪るもんですか。」

「でも、先刻、此の電信が参りました時、何です

か、お顔の色が………」

「……故障のた為ですよ、青天井の煤拂は

下さりませんからな、は、は。」

と笑つた。」

坂をするノ、と這上る、蝙蝠か、穴熊のやうなの

が、衝と近く来ると、海軍帽を被つたが、形は郵便

の配達夫。高等二年ぐらゐな可愛い顔の少年

が、丁と恭しく禮をした。

「あゝ、丁どいま繋つた。」

「何うした故障でございますか。」

と切口上で、然も心配をしたらしい。たのもし  
ぢやあございませんか。

「網掛場の先の處だ、鳥を蛇が捲いたなりで、電  
線に引搦つて死んで居たんだよ。鳥が引銜へて 飛  
ばうとしたんだらう・・・可なり大な重い蛇だ  
から、飛切れないで鋼線に留つた處を、電流で殺さ  
れたんだ。ぶら下つた奴は、下から波を打つて鎌首  
をもたげたなりに、黒焦に成つて居た ー 君、  
急いでくれ給へ、約四時間延着だ。」

「はづ。」

云つて行くのを、

「あゝ、時さん。」

とお道さんは沈んで呼んだ。と、寂しい笑顔に向  
け直して、

「配達さん ー 何處へ・・・。」と訊いた。

少年が正しく立停まつて、疊んだ用紙を眞すぐに  
視て、

「狼温泉 ー ー

二葉屋方 ー ー

村上縫

子……」

「そして執方から。」

「ヤホ次郎。――行つて來ます。」

「そんな事を聞くもんぢやあない。」

「あゝ、濟みませんでした。」

「何、構はないやうなもんぢやあるがね――

どつこいしよ。」

だが、がたと音がする。先生、もう一つの卓子を引立つて、猪と取組むやうに勢よく持つて出ると、お道さんはわけも知らないなりに、椅子を取つて手傳ひながら、

「何う遊ばすの。」

と云ふうちに、一段下りた草原へ据ゑたんでございますがね、――わけも知らずに手樽つた、お道さんの心持を、あとで思ふと涙が出ます。――と肩もげつそりと、藤助は沈んで言つた。

「で、何でございますよ――何う遊ばすの

かと、」お道さんが言ふと、心持、「此の日暮には此處に客があるかも知れんと、先生が言ひますわ。」

あれ、それぢやこんな野天でなく、と、言はうぢや  
あございせんか。

「いや、中で間違があると成らるので。」

「え、間違とおつしやつて。」

とお道さんが、ひつたり寄つた。

「私は、」

と先生は、肘で口の端を横撫して、

「髻もまづいが、言ふ事がまづくて不可んです。

間違ぢやあない、故障です。素人は氣なしだからし  
て、あんな狭い天幕の中で、器械にでも障つて、又  
故障にでも成ると不可のだ。決して心配な事では  
ないのです、——さあ飯だ、飯だ。」

と今度は何故か、箸を着けずに辨當をしまひかけ  
て、……親方の手前もある、客に電報が来た  
様子では、また和女の手も要るだらう、餘り遅く成  
らないうちにと、懇に言ふと、

「はい、はい。」

と柔順に返事する。片手間に、繼掛けの紺足袋と、  
寝衣に重ねる浴衣のやうな洗濯ものを一包、辨當を  
ぶら下げて、素足に藁草履、こゝらは、山家で——  
悄悄と天幕を出た姿に、最う山の影が薄暗く隈を

取つて映りました。

「今、何時だらう。」

と天幕口へ出て、先生が後姿を呼びましたね。

「……四時半頃にも成りませうか。」

「時計が止つたよ——氣をつけておいで。」

と大な懐中時計と、旗竿の影を、すつくり立つて、片頬夕日を浴びながら、熟と落着いて視めて居なざる。……落着いて視ちやあ居なすつたが、先生少々何うかなさりやしねえのかと思つたのは、慥う變に山が寂しく成つて、通魔でもしさうな、靜寂の鐘の唄の鹽梅、何處となくドンーと響いて天狗倒の木精と一所に、天幕の中ぢやあ、局の掛時計がコトリノゝと鳴りましたよ。

お地藏様が一體、もし、此の梟ヶ嶽の頭を肩へ下り口に立つてござる。——私どもは、何うかすると一口の中にや人間の數より多くお目に掛る、至極可懐しいお方だが……。後で分りました。此の丘は、むかし、小さな山寺があつたあとださうで、然う言や草の中に、崩れた石の段々が篤と一所に、

眞下の徑へ、山懐へまとつて居ます。其の下の徑と云ふのが、温泉宿入りの本街道だね。

お道さんが、歸りがけに、其の地裁様を拝みました。石の袈裟の落葉を拂つて、白い手を、ざつと合せて、しばらくして、

「また、お目にかゝります。」

と顔を上げて、

「後程に、――」

最う先生は天幕へくゝ入つた。――で、私に沁々とした調子で云つた時の面影が忘れられねえ。・

・・・睫毛にたまつて、涙が一杯。・・・風が冷く、山はこれから、濕つばい。

秋の日は釣瓶落しだ、お前さん、もうやがて初冬  
とは言ひ條、別して山家だ。靜に大沼の眞中へ石を  
投げたやうに、山際へ日暮の波が輪に成つて颯と廣  
がる中で、此の藤助と云ふ奴が、何をしたらと思召す。  
三尺をしめ直す、脚絆の埃を拂つたり、荷づなを  
天秤に掛けたり、はづしたり。・・・三味線の  
糸をゆるめたり、袋に入れたり。・・・さて又袋

を結んだり。

其處へ……いまお道さんか下りました、草にきれ／＼の石段を、攀ぢ／＼、づつと上つて来た、一個、年紀の少い紳士があります。

山の陰気な影をうけて、凄いやうな色の白いのが、黒の中折帽を廂下りに、洋杖も持たず腕を組んだ、背廣でオウバアコトと云ふのが、色が又妙に白茶けて、うそ寂しい、瘠せて肩の立つた中脊でね。此が地藏様の前へ来て、すつくりと立つたと思ふと、頭髮の伸びた技師の先生が、づか／＼と天幕を出ました。

それ卓子を中心に、控へて、開いて、吃と向合つたと思召せ。

少い紳士が慇懃に、

「失禮ですが、立野龍三郎氏が在らっしゃいます

か。

」

「然やう、お尋を蒙りました龍三郎、私であります。

」

「申しおくれましたた、私は村上八百次郎と申すも  
のです。はじめてお目にかゝります。……唯今、  
名刺を。」

「いや、」

と先生い卓子の上へ兩手をづかと支いて、

「三年前から、御尊名は、片時と雖も相忘れませ  
ん、出過ぎましたが、略、御訪問に預りました御用  
向も存じて居ります。」

唯、少いのが少し吃と成つて、

「用向を御存じですか？」

「先づ、お掛け下さい。」

と先生は、ドカリと野天の椅子に掛けた。

何となく氣色ばんだ雙方の意氣込が、殺氣を帯び  
て四邊を拂つた。此の體を視た私だ。むかし物語に  
よくあります、峰の堂、山の祠で、怪しく凄い神た  
ちが、神つどひにつどはせたと云ふ場所へ、破戒坊  
主が、はひ蹲つたと云ふ體で、恐る／＼、地藏様の  
前に蹄んで、恚う、伏拝む形をして、密と視たんで。

先生は更めて、兩手を卓子につき直して、

「―― 受信人、

狼温泉二葉屋方、

村上縫子、發信人は尊名、貴姓であります。

コンニチゴゴツク。ヨウイ（今日午後着く。用意）

「

と聞きも濟まらず、若い紳士は、斜に衝と開いて、

身構へて、

「何、私信を見た上、用件を御承知に成りました

な。」

「偏に申譯をいたします。電報を扱ひます節、文

字は拾ひますが、文字は普通……拾ひますが、

職務の徳義として、文字は綴りまして、用件は記

憶しません。然る處、唯今申上げました（コンニチ

ゴゴツク、ヨウイ）で、不意に故障が起りました、

幾度も接續を試みますうちに、うかと記憶に貽つた

のです。のち四時間、漸と電線が恢復して――

（ヨウイ）と受信しましたのです、謹で謝罪いた

します。」

と面を上げ、乾びた咳して、

「即ち、受信人、狼温泉、二葉屋方、村上縫子。

發信人尊名、貴姓。即ち、（今日午後着く。用意よ

きか）。」

「分りました。」

と静に言ふ時、ふと見返つた目が、私に向いた、

と一所にな　先生の眼も光りました。

怯えて立つたね、悚然した。

荷を擔いで、ひようろ、ひよる。

漸く石段の中ほどで、吻と息をして立つた處が、

薄暮合の山の凄さ。・・・天秤かついだ己が形

が、何でございますかね、天狗様の下男が清水を汲

みに山一つ彼方へと云つた體で、我ながら、餘り世

間離れがした心細さに、

「ほつ、」

と云つたが、聲も、ふやける。肩をかへて性根だ

めしに、其處で一つ

「鑄掛　　錠前の直し。」

何と　　―　　旦那。」

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

時に――雪の松明が二把。前後に次第に高く  
 成つて、白い梟、化梟、蔦葛が鳥の毛に見えます、  
 其の石段を攀ぢるのは、まるで幻影の女體が捧げて、  
 頂の松、電信柱へ、龍燈が上るんでございま  
 した。

上り果てた時分には、最う降つてるのが止みまし  
 たつけ、根雪に残るのぢやあございませぬ、ほんの  
 前觸れで、一きよめ白くしましたので、ぼつとほの  
 白く、薄鼠に、梟の頂が暗夜に浮いて見えました。

苦しい時ばかりぢやあねえ。こんな時も神頼み、  
 で、私は崖縁をひよいと横に切れて、のしこと地藏  
 様の背後に蹲込んで覗いたんで。石像のお袈裟の前  
 へは、眞白に吹掛けましたが、うしろは苔のお法衣  
 のまゝ眞黒で、お顔が青うございましたよ。

大方いまの雪のために、先生も、客人も、天幕に  
 引籠つたんでございませう。卓子ばかりで影もない。

野天の其の卓子が、雪で、それ大理石。――立  
派やかなお座敷にも似合はねえ。安火鉢の歪んだ  
奴が轉がるやうに出て居ました。

其の火鉢へ、二人が炬火をさし込みましたわ。一  
ふさり臥つて、柱のやうに根を持つて、赫と燃えま  
す。其の灯で、早や出端に立つて出掛つた先生方、  
左右の形は、天幕が其のまゝの巖石で、言はねえ事  
ぢやあねえ、青くまた朱に刻みつけた、怪しい山神  
に、宛然だね。

ツ、とあとへ引いて、若い紳士が、卓子に、さき  
の席を取つて、高島田の天人を、

「縫子さん。」

と呼びました。

御婦人が、髪の毛の吹流を取つた、氣高い顔は、松明  
の火に活々と、其の手拭で、お召のコオトの雪を拂  
つて居なすつたけ。揺れて山茶花が散るやうだ。

「立野さんに御挨拶をなさい。」

「唯今。」

と靜に言つて、例の背後に掛けた竹の子笠を、紐

を解いて、取りましたが、吹添つて、風はるのに、  
氣で鎮めたかして、その笠が動きもしません。

「タイプル卓子の脚あしに、お道みちさんのかさを重かさねて置おいて、

「あなた貴方ごきげん　――　御機嫌ごきげんよう。」

「は。」

と先生せんせいは一言ごんい云いつた切きり、顔かほも上あげないで、めり込こ  
むやうに深ふかく卓子タイプルの端はしについた太ふとい腕うでが震ふるへたが、  
それより深ふかいのは、若旦那わかだんなの方ほうの年とし紀きもない言いはな  
い額ひたひに刻きざんだ幾筋いくすぢかの皺しわで、短みじかく一分ぶがり刈かりかと思みえる  
頭あたまは、坊ぼうさんのやうで、福ふく々くしく耳みみの押おつたおほきつて大おほい  
のに、引ひ締しまつた口くちが窪くぼんで、大おほきく見みえるまで、げ  
つそりと頬ほの肉にくが落おちて居ゐる。

「おくさん夫人。」

と先生せんせいはうつむいたまゝで、

「ふた再び、御機嫌ごきげんのお顔かほを拝はいすることを得えまして、  
私わたし一代だいの本懐ほんくわいです。生うまれつきの口くち不調ぶてう法はふが、斯かく眼まのあ  
前たりに、貴方あなたのお姿すがたに對たいしましては、何なにも申まを上げる言ことは  
を覺おぼえませんが、唯たゞしかし、唯今たゞいま。」

と、よろめいて立たつて、椅子いすの手てに縋すがりました。

「唯今、一言御挨拶を申し上げます。」

と、天幕に入ると、提げて出た、卓子を引抱へたやうなものではない千仞の重さに堪へない體に、大革靴を持った胸が、吐呼吸を浪に吐く。

それと見ると、蓑を絞つて棄てました、お道さんが手を添へながら、顔を見ながら、搦んで、纏れて、うつかりしたやうに手傳ふ姿は、却つて、あの、紫の片袖に魂が入つて、革靴を抜けたやうに見えました。

ずしりと、卓子の上に置くと、  
一足退つて、起立の形で、  
先生は

「最早や、お二方に對しましては、  
夫婦に向ひましては、立つて身を支へるにも堪へません、一刻も早く此の人畜の行爲に對する、御制裁を待ちます。即時に御處分のほどを願ひます。」

若旦那が、

「よろしいか。」

と些と甘いほどな、此の場合優しい聲で、御夫人に言ひました。

「はい。」

と、若奥様は潔い。

若旦那はまつすぐに立直つて、

「立野さん。」

「

「では、御要求をいたします。」

「謹んで承ります、一点と雖も相背きはいたしま

すまい。」

「其處に、卓子の上に横にお置きなさいました、

革靴を、縦にまつすぐにお直し下さい。」

「承知いたしました。いや、罪人の手傳

をしては、お道さん、汚れるぞ。」

と手傳を拂つて、緊と其の處へ据直す。

「立野さん。貴下は革靴の全形と折重つて、其の

容量を外れない範圍内にお立ち下さい。縫子が私の

妻として、婚禮の日の途中、汽車の中で。」

と云ふ聲が少し震へました。

「貴下に、其の紫の袖を許しました、其の責に任

ずるために、こゝに短銃を所持して居ります。――

其の短銃を以て此處に居て革靴を打ちます。彈丸

を以て錠前を射切るのです。錠前を射切つて、其の片袖を――同棲三年間――まだ純眞なる處女の身に於て、私のために取返すんです。袖が返ると、もに、更めて結婚します。夫婦に成ります。と、勿論しかし、其が夫婦のもの、身の終結に成るかも分りません。何故と云ふに、革靴と同時に、兇器を以て貴下のお身體に向ふのです。萬一お生命を縮めると成れば、私は其の罪を負はねば成らないのですから。其は勿論覺悟の前です。……お察し下さい、此は殆ど私が生命を忘れ、世間を忘れ、甚しきは一人の親をも忘れるまで、寢食を廢しまして、熟慮反省を重ねた上の決意なのです。はじめは貴方が、當時汽車の窓から赤城山の絶頂に向つて御投棄してに成つたと言ふ、革靴の鍵を、何とぞして、拾戻して、其の鍵を持ちながらお目にかゝつて、貴下の手から錠を解いて、縫の其の袖を返して頂きたいと存じ、凡そ半年、百日に亙りまして、狂と言はれ、痴と言はれ、愚と言はれ、嫉妬と言はれ、じんすけと嘲けられつゝも、多數の人数を狩集めて、あの邊の汽車の沿道一帯を、粟、蕎麥、稻を買求めて、草に刈り、芥にむしりい甚しきは古塚の横穴を發いて

まで、捜させました。流星の如く天際に消えたので  
せう、一點似た釘も見當りません。――唯  
今……要求しますのは、其の後の決心である  
事を諒として下さいまし。縫もよく此の意を對して、  
三年の間、晝夜を分たず、的を射る修練をいたしま  
した。――最初、的をつくります時、縫がもの  
さしを取つて、革靴の寸法を的に切りましたが、こゝ  
で實物を拝見しますと、其の大さと言ひ、錠前のあ  
る位置と言ひ、殆ど寸分の違ひもありません。・  
・・不思議です。・・・特に奇蹟と存じます  
のは、――家の地續きを劃つて、的場を建てま  
したので、土地の様子、景色、一本の松の形、  
地藏のあるまで。」

――私はすくんだね――

「夢のやうによく似て居ます。・・・多分、  
皆お互に、恚うした蓬命だと存じます。・・・  
短銃は特に外國に注文して、英國製の最優良のを  
取寄せました。連發ですが、彈丸は唯一つしか籠め  
てありません、屹と仕損じますまい。しかし、御覺

悟を下さいますし。――尤も革靴と重つてお立ち  
下さいますのに、其の間隔は、五間、十間、或は百  
間、三百間、貴下の、お心に任せます。要は唯、着  
弾距離をお離れに成りません事です。」

「一步も此處を動きません。」

先生は、拱いた腕を解いて言ひましたぜ。」

――然うだらうと、私たちも思つたのである。

「堪らねえやね。お前さん。」

私あ猿坊のやうに、ちよろりと影を蜿つて這出して、其處に震へて立つて居る。お道姐さんの手に合鍵を押つけた。早く早く、と口ぢやあ言はねえが、袖を突いた。

「若奥様の手が、最う懐中に入つた時でございますよ。」

「御免遊ばせ。」

と縫りつくやうに、伸上つて、お道さんが鍵を合せ合せするのが、あせるから、ツル／＼と二三度にりました。

「あゝ、一寸。」

と若奥様が、手で壓へて、

「何うぞ……其ばかりは。」

と清しく言ひます。此の手二つが觸つたものを、錠前の奴、ぐわんとして、雪に成つても消えなんだ。

舌の硬ばつたやうな先生が、

「飛んでもない事——お道さん。」

「否、構ひません。」

と若旦那はきつぱりと、

「飛んでもない事ではありません。それが當然な  
のです。立野さん。貴下が御自分でなくつても、貴  
下が許して、錠前をさへお開き下さるなら——  
方法は選びません。短銃なんぞ何に成りませう、私  
はそれで満足します。」

「旦那様。」

と精一杯で、お道さんが、押し止められた一つの手  
を、それなり先生の袖に絶つて、無量の思の目を凝  
した。

「はあ、」

と落込むやうな大息して、先生の胸が崩れようと  
しますとな。

「貴方、．．．あの鍵が返りましたか。．．  
．．優しい、お道さん、美しい、姐さん、．．  
．．お優しい、美しい姐さんに、貴方は最うお心  
か移りましたか。」

と云つて、若奥様が熟と視ました。

先生が蒼く成つて、両手でお道さんを押除けなが

ら、

「此は餘所の娘です、あはれな孤兒です。」  
とあとが消えた。

「決行なさい、縫子。」

「……………」

「撃て、お撃ちなさい。」

「唯今。」

と肩を軽く斜めに落とすと、コオトが、すつと脱げ  
たんです。煽りもせぬのに氣が立つて、楓と火の上  
る松明より、紅に燃立つばかり、緋の紋縮緬の長襦  
袢が半身に流れました。……………袖を切つたと言  
ふ三年前の婚禮の日の曠衣裳を、其のまゝで、一方  
紫の袖の紋の揚羽の蝶は、革鞆に留まつた友を慕つ  
て、火先にひら／＼と揺れました。

若奥様が片膝ついて、其の燃ゆる火の袖に、キラ  
りと光る短銃を構へると、先生は、兩方の膝に手を  
垂れて、目を瞑つて立ちました。

「お身代りに私が。」

とお道さんが、其の前に立塞がつた。

「あゝ危い、那方。」

と若旦那が聲を絞つた。

若奥様は折敷いたまゝで、

「不可ません。ー お道さん。」

「いゝえ、本望でございます。」

「私が肯きません。」

と若奥様が頭を掉ります。

「貴方が、お肯き遊ばさねば、旦那様にお願ひ申上げます。こんな山家の女でも、心にかはりはござんせん、願を叶へて下さいまし。お情はうけませんでも、色も戀も存じて居ります。もみぢを御覽なさいまし、つれない霜にも血を染めます。私は唯活きて居りますより、旦那さんのかはりに死にたいのです。其の方が嬉しいのです。こんな事があらうと思つて、最う家を出ます時、なくなつた母親の記念の裾模様を着て参りました。・・・手織木綿に前垂した、それならば身分相應ですから、人様の前に出られません。時おくれの古い紋着、襦袢も帯もうつりません、あられもないなりをして、戀の仇の奥様

と、並ならんでこゝへ参まゐりました。ふびんと思おもつて下さ  
いまし。あゝ女をんなは淺あさま間ましい。私わたしには唯たゞ一枚まい、母親ははの  
記念かたみだけれど、奥おく様さまのお姿すがたと、こんなはかないなり  
をくらべて、思おもふ方かたの前まへに出でるのは死しぬよりも辛つらう  
ござんす。それさへ思おもひ切きりました。男をとこのために死し  
ぬのです。冥みよ加うがに餘あまつて勿もつ體たいない。――唯たゞ心こゝろがゝ  
りなのは、私わたしと同じ孤みなしこ兒この、時ときちゃん、（少年せうねんの配はい  
達夫たつふ）の事ことですが、あの兒こも先生せんせいおもひですから、  
慚かうと聞きいたら喜よろこびませう。」

若わか旦那だんなの目めにも、奥おく様さまにも、輝かがく涙なみだが見みえました。  
先生せんせいは胸むねに大おほ波なみを打うたせながら、半なかば串じゆ戲たんにする  
やうに、手てを取とつて、泣なき笑わらをして、

「これ、馬ば鹿かな、馬ば鹿かな、ふゝゝ、馬ば鹿かな事ことを。」

「えゝ、馬ば鹿かな女をんなでなくつては、こんなに旦那だんな様さま  
の事ことを思おもひはしません。私わたしは、馬ば鹿かが嬉うれしうござい  
ます。」

「弱よわつた。これ、詰つまらん、そんな。」

「お手て間まが取とれます。」

「さあ、お退どき、これ、其そ方ちへ。」

「いゝえ、いゝえ。」

否々をして、頭をふつて甘える肩を、先生が抱いて退けようとするなり、くるりとうしろ向きに成つて、前髪を犇と胸に當てました。

呼吸を鎮めて、抱いた腕を、ぐいと背中へ捲きましたが、

「お退きと云ふに。――やあ、お道さんの御母君、御母堂、お記念の肉身と、衣類に封して失禮します、御許し下さい。……御免。」

と云ふと、抱倒して、

「あゝれ。」

と震へてもがくのを、しかと片足に踏据ゑて、仁王立にすつくと立つた。

「用意は宜しい。……縫子さん。」

「」

「」

「然やうなら、……」

「……然やうなら、貴方。」

日光の御廟の天井に、墨繪の龍があつて鳴きます、尾の方へ離れると音はしねえ、頤の下の低い、處で手を叩くと、コリンと、高い天井で鳴りますので、

案内者は、勝手に泣龍と云ふのでございますが、同じ音で。――

コリンと響いたと思ふと、先生の身体は左右へふら／＼して動いたが、不思議な事には倒れません。

南無三寶。

片手づきに、白襟の衣紋を外らして仰向きになん  
なすつた、若奥様の水晶のやうな咽喉へ、口からた  
ら／＼と血が流れて、元結が、ぷつりと切れた。  
トタンにな、革靴の袖が、する／＼と抜けて落ち  
ました。

「貴方……短銃を離しても、もう可うござ  
いますか。」

若旦那が跪いて其の手を吸ふと、釣鐘を落したや  
うに、軽さうな手を柔かに、先生の膝に投げて、

「あゝ、嬉しい。……立野さん、お道さん、  
短銃をそちらへ向けて打つやうな女とお思ひなさい  
ましたか。」

「只今、立處に自殺します。」

と先生の、手をついて言ふのをきいて、かぶりを  
掉つて、櫛笄も、落ちないで、亂れかゝる髪を其の  
まゝ莞爾して、

「否、百萬年の後に……また、お目にかゝ  
ります。お二方に、これだけに思はれて、縫は世界  
中のしあはせです。――貴方、お詫は、あの世か  
ら……」

最後の言葉でございました。」

「お道さんが銀杏返の針を抜いて、あの、片袖を、  
死骸の袖に縫つけました。」

其の間、膝にのせて、胸に抱いて、若旦那が、お  
縫さんの、柔かに投げた腕を撫で、／＼、

「此の、清い、雪のやうな手を見て下さい。私の  
偏執と自我と自尊と嫉妬の爲に、詮ずるに烈しい戀  
のために、――三年の間、夜に、日に、短銃を  
持たせられた、血を絞り、肉を刻み、骨を砂利にす  
るやうな強情に、よくも此の手が、鐵にも鉛にも成  
りませんでした。あゝ、全く魔の如き殘虐にも、美

しいものは滅びません。私は慚愧します。しかし、  
貴下と縫子とで、どんなにもお話合のつきますやう  
に、私に三日先立つて、縫子を此方によこしました。  
それに、あからさまに名を云つて、故と電報を打ち  
ました。・・・貴下を當電信局員と存じまして  
いたした事です。とにかく私の心も、身の果も、や  
がて、お分りに成りませう。」  
と、いひ／＼、地藏様の前へ、男が二人で密と昇  
ぐと、お道さんが、笠を伏せて、其の上に帯を解い  
て、疊んで枕にさせました。

私も十本の指を、額に堅く組んで頂いて拜んだ。  
そこらの木の葉を、やたらに火鉢にくべなが  
ら・・・

「失禮、支度をいたしますから。」  
若旦那がする／＼と松の樹の處へ行きます。  
其處で、内證で涙を拂ふのかと思ふと、肩に一揺  
り、ゆすぶりをくれるや否や、切立の崖の下は、剣  
を植ゑた巖の底へ、眞逆様。・・・霧の海へ、  
薄ぐろく、影が残つて消えませぬ。

「――旦那方。」

先生を御覽なせえ、いきなりうしろからお道さんの口へ猿轡を嵌めましたぜ。――一人は放さぬ、一所に死なうと悶えたからで。――それをね、天幕の中へ抱入れて、電信事務の卓子に向けて、椅子にのせて、手は結へずに、腰も胸も兵兒帝でぐる／＼巻だ。

「時夫の来るまで……」  
然う言つて、石段へづつと行く。

私は下口まで追掛けたが、何うして可いか、途方にくれてくる／＼廻つた。

お道さんが、さんばら髪に肩を振つて、身悶えすると、消えかゝつた松明が赫と燃えて、あれ／＼、女の身の丈に、めら／＼と空へ立つた。

先生の身體が、影のやうに歸つて来て、いましめを解くと一所に、五體も溶けたやうなお道さを、確と腕に抱きました。

「いや、何とも……酔つた勢ひで話しまもたが、其の人たちの事を思ふと、何とも言ひやうがねえ。」

實は、私と云ふものは……若奥様には内證  
だが、其の高崎の若旦那に、頼まれて、技師の  
方がいい、とさへ一言云へば、すぐに合鍵を拵へる  
やうに、道中お抱へだつたので。……何、鍵  
までもありやしません。――天幕でお道さんが  
相談をしました時、寸法を見るふりをして、錠は、  
はづして置いたんでございますのに――

皆、何とも言ひやうがねえ、見てござつた地藏様  
にも手のつけやうがなかつたに違えねえ。若旦那の  
お心持も察して上げておくんなせえ。

――あくる日岨道を傳ひますと、山から取つた  
水樋か、空を走つて、水車に颯と掛ります、眞紅な  
木の葉が宙を飛んで流れましたつけ、誰の血なんで  
ございませう。」

峰の白雪麓の氷  
今は互に隔てゝ居れど、

あとで、鑄掛屋に立山を聴いた――追善の

心こころである。皆みな涙なみだを流ながした。……。座ざは通つ夜やのやう  
であつた。

姨うば捨すて山やまの月つき霜しもにして、果はてしなき谷たにの、暗くらき霧もやの底そこに、  
千ちく曲まが川がは水すい晶しやうの珠じゆ數ずの亂みだるゝ如ごとく流ながれたのである。

【完】